

都道府県名	佐賀県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	佐賀大学文化教育学部附属中学校					
学 年	1 年	2 年	3 年	特殊学級	計	教員数
学級数	4	4	4	0	12	24
生徒数	160	154	157	0	471	

研究の概要

1. 研究主題

<p>学びが育つ学習環境デザインの研究 - 自律・協働・笑顔の授業づくりを通して -</p>
--

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>全学年・全教科 学校研究であり、全教科・全領域で進めることを前提としたうえで、昨年度に引き続き、主として教科の授業に視点を置いて、研究を進めてきた。学校研究主題を踏まえ、教科ごとに教科テーマを設定し、研究を進めている。</p>
--

(2) 年次ごとの計画

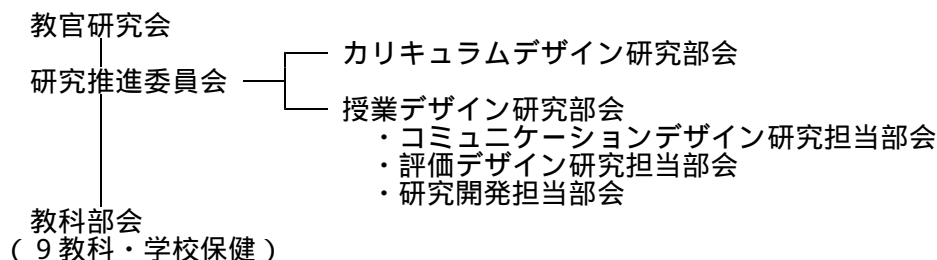
平成14年度	<p>テーマ 学びが育つ学習環境デザインの研究 - 自律・協働・笑顔の授業づくりを通して -</p> <p>研究内容・方法 (1) 「学び」、「学習環境デザイン」についての先行研究調査並びに定義づけ (2) 単元（題材）並びに1単位時間における授業デザイン (3) 授業デザインに資する評価活動と生徒の自己学習力育成に資する自己評価活動 (4) コミュニケーション理論の研究と学びあいの集団づくり (5) 学校目標の達成とカリキュラムとの関連に着目したカリキュラム研究</p>
--------	--

平成15年度	<p>テーマ 学びが育つ学習環境デザインの研究 - 自律・協働・笑顔の授業づくりを通して -</p> <p>研究内容・方法 (1) 本校における学習環境デザイン理論に基づいての授業実践とその考察～学習環境デザインの9つの要素に関わって (2) 単元（題材）並びに1単位時間における授業デザイン (3) 授業デザインに資する評価活動と生徒の自己学習力育成に資する自己評価活動 (4) コミュニケーション理論の研究と学びあいの集団づくり (5) 言語能力の育成を基盤にすえたカリキュラム構想</p>
--------	---

平成16年度	<p>テーマ 学びが育つ学習環境デザインの研究 - 自律・協働・笑顔の授業づくりを通して -</p> <p>研究内容・方法 (1) 授業実践に基づく学習環境デザイン理論の検証とまとめ</p>
--------	---

- (2) 本校研究実践の成果についての検証
- (3) 言語能力の育成を基盤にすえたカリキュラムの実践とその評価

(3) 研究推進体制



授業デザイン部会は、基本的に担当ごとに研究を進める。月に1回、授業デザイン研究部会全員での会をもち、進捗状況の報告や研究内容に関わる協議を行い、共通理解を図る。

研究推進委員は、各部会長（2名）と授業デザイン研究部会のそれぞれの担当の長（3名）とする。

研究内容の焦点化を図るために、昨年度の研究組織を一部改編し、上記のようにした。

本校研究主題である「学びが育つ学習環境デザインの研究～自立・協働・笑顔の学習づくりを通して」を具体化していくにあたって、学習環境の主たる対象を「カリキュラム」と「授業」におくこととした。

「授業」は学習者の学びが育つ中心な場であり、そこでのねらいは学習者自身の学習デザインを確立することにあると考えている。そして、そのねらいを実現するための授業デザインの視点を「コミュニケーション」「評価」「国語力育成」の3点とした。「コミュニケーション」は、授業デザインを成立させるための重要な要件である。教師と学習者のよりよい関係を作り出し、互恵的な学びを生み出す学びあいの集団を育てるためにコミュニケーションが重要な役割を果たすと考えている。「評価」は、授業デザインが更によりよいもの志向するための原動力と考えている。教師は、授業場面において、学習者の学習改善につながる評価をどのように展開していくか、また、その結果、授業デザインが学習者の学びを育てるものとしてどうであったかということの評価し、更なるデザインへとつなげていく必要がある。更に、学習者自身の学習デザインを確立するにあたっては、学習者の自己評価力の育成は欠かせないものである。「国語力育成」は、授業デザインを支え、より確かなものにする要件であると考えている。教科共通に必要な力を明らかにし、それらの効果的な指導と確かな定着を通して、授業に主体的に関わり、自らの学習デザインを確立していく学習者に必要な力を育成する。

このように、これら3つの視点からのアプローチにより、授業デザインを進めていくこととした。

更に、授業デザインよりももっと長いスパンや広い領域を関連づけ、組織化することを考えたときに、「カリキュラム」が重要な意味をもつ。カリキュラムをあらかじめ計画された教育計画とそれに基づく教育実践並びにそれらをつなぎ合わせる媒介ととらえ、それらを本校なりの考え方に基づいてデザインしていくことが、学習者に対する大きな学習環境の提示となり得るのである。

以上のことから、授業デザイン、カリキュラムデザインという2つの部会から研究組織を構成し、更に、部会の中で研究のアプローチの視点に関わって複数の担当部会を置くこととした。なお、国語力育成については、平成15年度から文部科学省の研究開発指定を受け、「国語力の育成を基盤に据えた教育課程・教育内容・教育方法及び評価の在り方についての研究」を進めることとした。

平成15年度の研究成果及び今後の課題

1. 研究成果

- (1) 本校研究主題へのアプローチの方法として、学習環境デザインの9つの要素を策定した。そして、これら9つの要素を具現化することが、本校研究主題の実現につながると考えた。

学習者の学習履歴を踏まえる
学習者の個人差を生かす
学習者と授業者のねらいの共有化を図る
学習者の参画を促す
学習者の共同体意識を喚起する
学習者と社会とのつながりを意識させる
学習者の評価活動を取り入れる
学習者が身につけた基礎・基本を繰り返し活用する場を設定する
学習者の言語による思考及び表現が生かされる場を設定する

上記の9つの要素については、1つの単元や題材にすべてを盛り込むという考えではなく、以上の要素の中から教科の特性や教科のテーマとの関連の中で、いずれかを重点化することも考えられる。また、年間を通して、（または3年間を通して）という長いスパンの中で、これらの要素を盛り込んでいく。これらの要素を盛り込んだ学習環境デザインを通して、学習者の学びが育つと考える。

また、これらの要素と要素をつなげる方法の工夫をすることによって、様々な組み合わせで、要素同士が関連をもち、学習環境デザインの幅が広がると考えられる。

学習者の学習履歴を踏まえる

本校では学習履歴を顕在的なものだけでなく、潜在的なものまで含めて捉えている。顕在的な履歴とは学習者の中に残っているもの、すぐに引き出せるもの、また、実際に活用しているものであり、身につけている知識・技能・活動・関心・意欲・概念などである。潜在的な履歴とは学習者が何かをきっかけに思い出せるものである。また、学習者が思い出せないことや身につけていないこと、誤って理解していること（誤概念）なども履歴として捉える必要があると考えている。

学習履歴の捉え方としては、事前による意識調査や小学校における履歴調査、先行学習グループとの打ち合わせ、ブレインストーミングなどの活動の導入などが考えられる。

また、それらを踏まえるということは、具体的には

- ア 指導者が事前に単元を構想する際の情報として生かす。
- イ 指導者が授業展開を修正したり、次時の授業の構想を修正したりする際の情報として生かす。
- ウ 学習者自身が自らの学習履歴を振り返り、その変容に気づいたり、更に改善を図るための場を設定したり、手だてを工夫する。

授業実践例

《保健体育科》

単元「ダンス」（第1学年）において、事前のアンケートや学習者への聞き取り調査などの中から、ダンスに対する学習者の意識を把握した。そして学習者がもっているダンスの授業に対する不安を解消できるような発表形態を工夫した。具体的には、メドレー形式で参加体験型の発表会を仕組み、発表者と聴衆という明確な区分をせず全員が時空を共有する一体感が得られるように工夫をした。[上記のアの例]

《技術・家庭科》

題材「健康的に食べる～健康的な献立をつくらう～」(第2学年)において、学習履歴を生かした振り返りの時間を設定し、自らの学習の定着度を自覚させた。具体的には、学習に入る前に自らが立てた献立と学習途中の段階でテストの設問として解答した献立、更に本時の学習を踏まえて修正を加えた献立を比較することによって、自らの食生活に関わる知識の定着や意識の変化を自覚させた。更に、学習事項を生活に生かしていこうとする態度やこれからの学習の展望につなげることを試みた。[上記のウの例]

《美術科》

題材「自然物からの構成」(第1学年)では、授業の始めと終わりに振り返りカードを記入させ、前時の振り返りと本時の目標を確認させることにより、それを次時への意欲へとつなげることをねらった。授業の導入において記入させることによって、前時の学習の見通しや修正を行わせることができた。また、それを数人に発表させることによって、生徒が本時の学習に対する意識を把握し、教師の授業デザインの確認や修正、変更につなげていくことができた。[上記のウに関連]

《英語科》

選択コース「単語の達人」(第2学年)において、単語の学習方法について、これまでの自分の学習状況を振り返らせ、改善をさせる。その際、友達との意見交換などを通して、新しいアイデアを取り入れさせる。また、既習の単語をあるカテゴリでくくることで、これまでランダムに記憶してきた単語を整理させ、更なる語彙の拡大につなげたい。[上記のウに関連]

学習者の個人差を生かす

個人差とは、知能、性格、学力、適性、態度、興味など多岐にわたるのであるが、本校では特に興味、適性の個人差を生かすことにより、多様な考え方に交わりながら、自らの視野を広げていくことがその中心となっている。更に、今後は、学力の個人差(学習内容の習熟の差や習熟に要する学習時間の差など)に対応する(できれば、それを生かす)実践を明確にしていくことが課題となる。

授業実践例

《社会科》

単元「資源エネルギー問題」(第2学年)において、原子力発電推進の是非を討論することによって、資源エネルギー問題について多面的・多角的に考えさせた。この際、役割討議(ディベート)のための資料収集の度合いや立場の違いから意見をぶつけ合うことによって、より深くメリットとデメリットを比較・検討させ、ディベート後に本音の意見文を書かせ、発表し合うことで、考え方の違い(個人差)を生かした授業展開を試みた。

《社会科》

単元「明治政府の政策は民衆のためになったか」(第2学年)において、廃藩置県や市民平等、地租改正など、明治政府が行った諸政策について多面的・多角的に考えさせた。生徒は、民衆の立場からそれらの政策を評価し、その評価理由をまず各班で検討させた。その後、班同士の意見交換会を設けることで、考え方の違い(個人差)を生かした授業展開を試みた。

《音楽科》

単元「アジアの音楽に親しもう」(第1学年)において、生徒一人一人が夏休みに取り組んだアジアの音楽レポートをもとに、「アジアの音楽紹介タイム」の時間を設定し、小グループやペアになって、自分が興味をもった音楽について紹介し合うという形式を取る。全員が一律に同じ音楽を鑑賞するのではなく、興味・関心が違ういろいろなメンバーが集まった小グループの中で多様な音楽に触れさせることにより、お互いの興味・関心の違いを生かした授業展開を試みる。

《英語科》

帯単元「身近な佐賀(故郷、日本)の風物紹介」(第3学年)は、1年次から実施しているものである。今年度は、前述の題材で、まず生徒はレポートを作成する。そのレポートをもとに毎授業の最初にスピーチを行い、他の生徒との質疑応答によるコミュニケーション活動を行う。生徒の身近な題材による内容でコミュニケーション活動を行わせることにより、授業に臨む雰囲気を高揚させるのに役立つほか、人前で話をするときのこつ習得を目指す。それぞれの視点(個人差)からのスピーチにより、生徒は他の生徒の考え方やものの見方・捉え方などを学ぶこともできる。

《英語科》

タスク活動「友達を紹介しよう」(第1学年)は、伝達目的の達成のため

に、学習者が既習の言語材料から選択して英語を使用する活動である。「何を伝えるのか」「どのような情報を求めて尋ねるのか」という伝達内容の選択もできる。この活動では、コミュニケーションを行うAとBには個人差・個性差があり、Aが正しい英文で尋ねたとしても、Bが理解できるとは限らない。その際にAは、発話を途中で修正したり言い換えたり、非言語手段を駆使しながらコミュニケーションを続けることが必要となる。

《保健体育科》

単元「水泳」において、生徒の目当てを達成するためには、十分な運動量を確保する必要がある。そこで、単元の導入で安全指導を徹底し、入水までのルーティンを理解させ、早くそろったペアから学習を始めるようにした。個人のめあては18段階に細かくスモールステップで示したスイミンググレードカードを用意した。毎時間更衣をすませた生徒は、ボードに記したその日のめあての欄にネームプレートを貼り付けることにし、授業の中でそのめあてが達成できた生徒は、新たに次のめあてにネームプレートを貼り替えるようにした。このことにより、一人一人の能力に応じためあてを選択することができ、目標達成に必要な学習時間の差にも対応することができた。そのため、ほぼすべての生徒が達成感を味わうことができた。

《数学科》

題材「九九表で考えよう」（第3学年課題学習）において、それぞれの生徒が自分が発見した性質を発表し合うことにより、多様な見方や考え方を知ることができ、課題を深く考察することに役立った。また、1学期に学習した式の展開や因数分解を利用して説明を行うことで、既習事項により課題解決が可能になることは、今後の学習にも有用であることを理解することができた。

学習者と授業者のねらいの共有化を図る

最初の段階としては、ねらいを学習者に提示することや、理解させることが基本となる。学習者は「何を学んでいるかがわかる授業」「どのような力がついているのかを実感できる授業」を望んでいるということは、本校における学習に対する意識調査（平成14年度実施）からも明らかである。ここでは、それをさらに進めて、授業者と学習者のねらいの共有化を図るものである。この場合、授業者の設定したねらいについては、授業者の許容範囲内で、学習者との話し合いをとおして、ねらいの修正が図られることも考えられる。

授業実践例

《社会科》

単元「住民としての地方の政治を考えよう」（第3学年）において、古川知事の講演を聞いての感想の意見交換会からスタートし、知事へ中学生の自分たちが「まちづくり」に関する提言（要望）を出そうという最終目標を生徒との話し合いで決めた。そして、そのためにはどんなことを学習する必要があるのかということを出し合い、学習する順番を決めた。生徒たちから出てきた学習内容として、地方自治とは何か、地方自治のしくみや仕事の内容、現状と課題などがある。これらを学習したうえで、要望を出し合いみんなで吟味し、よりよいものにしていくというデザインを生徒とともに考え、実践した。

《国語科》

単元「印象深く語ろう」（第3学年）において、学習活動の評価規準を学習者と協議のうえで設定し、それに基づく自己評価・相互評価活動を展開した。また、単元の最後に単元評価を行い、学習者自身の今後の学習の展望と授業者の授業改善の指針とすることとした。

学習者の参画を促す

学習内容や方法・順序を学習者が選択したり、設定したりすることなど、学習者に裁量権をもたせ、主体性を発揮できる場を保障し、授業者と学習者で授業を創っていくという基本的な立場に立つ。本校では、国語科教官の授業における先行学習グループの実践や、理科で取り組んでいるプラン学習などがその主な事例である。

授業実践例

《国語科》

単元「わかりやすく話す」（第1学年）他、できるだけ多くの単元において、先行学習を位置づけ、先行学習を担当するグループとの打ち合わせや対話の中から学習者の今までの学習履歴や学習に対する意識を探り、単元構想の修正を行った。また、授業の中で先行学習グループによる時間の保証をし、その活動を進めることは、学習者が主体的に授業に参画する態度につながり、自立的な学習が育つと考えられる。

《国語科》

単元「効果的に話そう」（第2学年）のまとめの活動を学習者自身が考えた言語活動の中から選択させた。その中で単元の一部を学習者に計画させることも試みた。具体的には、学習テーマ「自分が発見した『僕の防空壕』の魅力伝える」のために、最も適当だと思う言語活動を学習者が選択するというものであり、学習者は1年時の学習を振り返り、パネルディスカッション、スピーチ、対談、コマーシャル、劇など様々な言語活動を候補としてあげ、教師との対話や学習者同士の意見交換を通して、学習テーマを達成できるように適当な学習活動を考えさせた。

《国語科》

単元「私の新聞を作ろう」（第2学年）を学習するうえで必要な学習活動を考え、時間数と学習の順番を考え、学習者自身に単元全体の計画をさせた。ここでいう単元計画とは、新聞作りに関わる直接的な学習計画を立てることを指しており、教師自身の単元構想は、夏休みの課題から見通されたものであり、学習者に学習計画を作らせることも含んだ広く重層的なものである。具体的には、新聞を作成するグループごとに新聞を作るうえで必要となる学習活動を話し合い、カードに書いて板書する。そして、各グループから出されたものを学級全体で分類整理し、学習する順番を考え、グループごとに学習計画の作成を行い、実施するというものである。

《理科》

全学年における約半数の単元において、「プラン学習」を導入している。「プラン学習」では、学習の手順や実験の方法だけでなく、これまでは教師が設定していた時間配分や学習活動の流れについても、一定の枠の中で生徒が自らの意志で決定し、学習を進めるという流れを取る。現在は、「プラン学習」が効果的に行われるための構成要素を明らかにするとともに、実施可能な単元の開発中である。生徒の変容については、学習活動に対する意欲の高まりが確実に見られる。更に、自ら立てた計画であるため、責任をもって試行錯誤しながら自らの学びを模索している状況である。3年間の学習を通して、自らの軌跡を常に振り返らせながら、よりよい学びを主体的に作り出すことができる学習環境（主として物的環境）としての充実を図っている。

学習者の共同体意識を喚起する

学習者が学級集団や学年集団を、ともに学び合う「学びの共同体」として意識することがそのねらいである。そのための手だてとしては、学習形態の工夫や学級単位での協働作品制作の導入などにより、学習者が共通のねらいを意識するための手だてや、関わりの中で学習を進めなければいけないような場の設定をすることが考えられる。

授業実践例

《美術科》

題材「作者の心をパンフレットで伝えよう」（第1学年）において、コンピュータを使って、パンフレット形式の作品制作に取り組んだ。グループのメンバーがそれぞれの役割を分担してコラボレーション的に作品作りに取り組むような手だてをしくんだ。また、作品発表はポスターセッション形式で行い、生徒同士の相互評価や専門家の外部講師による評価などを生かしながら、自らの作品を振り返ることも試みた。

《音楽科》

題材「雅楽の響き」（第1学年）において、事前の学習レポートを生かし

でのワークショップ方式発表会を開き、雅楽に対する幅広い知識や技能に触れることができる機会を設定した。ワークショップでは、CD、MDやビデオ、実物の楽器等ができるだけ用いて、音や映像による知覚と感受を通じた理解を図った。発表者はワークショップの中で自分が考える雅楽のイメージを語ることを、参観者もワークショップに参加したうえでの自分の雅楽に対するイメージを紹介することで、学習者同士の交流が一層盛んになり、次時における雅楽に対する考えを広げる授業への導入ともなった。

《国語科》

単元「現代社会の若者の問題を文章で切り取る」(第1学年)において次のような実践を行った。教科書の説明文の特徴を見つけて出し合い、それを一覧表(「役立ち表現一覧表」)にして、説明文を書く段階で、その一覧表を役立てる。(ここまでは、読む力の育成を意図した学習デザイン。)次に、説明文を書くときに「役立ち表現一覧表」を参考にして説明文を書く。生徒が共同で作成したものを、それぞれの生徒が自らの学習に役立てることができる。

《美術科》

題材「日本の美を見つけよう」(第1学年)において、自分で調べて制作したパーツにお互いの共感や批評を行いながら、学級全体で作る協働制作作品へと発展させる。総合的な学習の時間に学んだ異文化理解・自国の文化理解から、日本の伝統や芸術を見直し、学級全体の協働活動の中で一つのパネルを制作していく。自分の思いを大事にしつつ、学級で共に協働しながら大きな作品を作るのである。また、制作したパネルを絵手紙にして、国際交流会で交流した留学生などに手紙を書くことで、国際交流を更に発展させる。

《数学科》

単元「連立方程式」(第2学年)の最終段階で、生徒の自由度を生かした問題づくりに取り組み、その問題の吟味をし合うことを通して、学習者同士の学びあいを育むことを意図した。学習事項の定着の度合いによって、作成した問題にも差異が見られたが、吟味の過程において、学習者の個人差に応じて様々な展開が見られた。学習グループの作り方や吟味することに対する目的意識をいかにもたせるかということが課題となった。

学習者と社会とのつながりを意識させる

教科で学習していることが社会とどのようにつながっているのかを意識させることにより、学習の意義を実感させ、学ぶことに対する価値を見出すことができることをねらっている。総合的な学習の時間においては基本的なことであるが、教科の学習においても考えなくてはならないことである。

授業実践例

《社会科》

単元「会社をつくろう」において、経済分野の授業に対する学習の興味・関心を高める手だての一つとして、実際に企業コンサルタント会社を設立した方を外部講師として依頼し、会社設立に関わる講話などを聞き、さらに、学習者が立てた会社設立のプランに対する指摘やアドバイスなどを通して、会社設立に関わり、現実的に問題になっていることに気づかせるなどの手だてを取った。導入段階においても、新製品や開発中の製品に関する新聞記事やベンチャー企業の紹介など社会とのつながりを意識させ、経済分野の学習をより身近なことと感じ取らせるための手だてを取った。

《社会科》

単元「人口の特色を調べよう」(第2学年)において、人口過密状態を解消する方法の一つの案として「首都機能移転問題」について考えた。移転する場合のメリットとデメリットを多面的・多角的にとらえることで、日本が抱える過密や過疎の問題について考えさせた。その際、意見が偏らないようにするために、役割討議を行った。また、気軽な気持ちで意見を出せるように、DSS(ディベート・サポート・システム)というソフトを使いコンピュータ上でチャット感覚によるディベートを行った。

《社会科》

単元「世界の国々を調べよう～ドイツ～」(第2学年)において、ドイツ

の環境政策と日本の取組との違いを調べることで、国レベルですべきことや国民レベルですべきことを意識させた。ドイツの環境教育や環境政策については、テレビ朝日が作成したビデオを編集して、短時間で焦点化した部分を見せるよう配慮した。学習後の感想を紹介し合う活動で、自然環境を大切にすることをドイツの特色を明らかにさせた。特に、国民レベルのゴミ分別やリサイクル、省エネルギーに対する姿勢から、日本人の環境に対する課題点を見出す生徒が多かった。

《社会科》

単元「フィールドワーク～なぜここにあるの？～」（第1学年）において「百聞は一見にしかず」を情報収集の柱として、調査探求活動を行った。地域の住民の人たちとのインタビュー活動により、地域のあらしや、住民の声を生かした政治などに触れている。公民的な分野で地方自治を学習するときに生かせると考えている。

《国語科》

単元「現代の若者の問題を文章で切り取る」において、新聞や自分の周囲の問題を発見し、テーマを決めて、それに関する情報を多く集めた。教科書の説明文教材で説明文の書き方を学んだ後、自分のテーマについて評論風意見文を書き、新聞に投書するなどの発信活動を行った。

《英語科》

単元名「工夫して意味を伝えよう」（第3学年）において、国際化の進展に伴い、日本に住む外国人の数が飛躍的に増加していく昨今の状況を考慮して、「日本に住むことになった外国人に伝えたいこと」をテーマに、自分が伝えたいこと（内容）を整理し、情報を収集してまとまりのある英文を作り発信を試みた。また、「工夫して」という点から、どのように（方法）伝えるとより効果的であるかをグループや学級全体で意見交換を行い、検討していった。

《英語科》

選択コース「世界各地の生徒と交流しよう」において、コースの授業デザインとしては、イギリス、アメリカ、オーストラリア、中国など、生徒が交流を希望している国に関する書籍（「地球の歩き方」等）を準備し、いつでも活用できる物的環境をつくった。人的な学習環境としては、交流希望の国の情報が得やすいように、学習相談・文化に関する質問のできるALTの紹介をした。中国については、留学生の紹介を行った。交流相手国の出身のALTをゲストに迎え、生活・文化・歴史・習慣などについての情報交換をさせた。

学習者の評価活動を取り入れる

本校において、評価を「生徒の学習改善活動や教師による指導計画や指導方法の改善に資するためのフィードバック情報であり」「あくまでも自己評価がその基本である」と捉えている。したがって、評価活動はそれのみで独立するのではなく、必ず目標の設定や評価情報を生かした改善活動に結びつけるような手だてが組織されるべきである。また、学習者が自己評価の意義を理解し、自己評価によって自らの学習状況を把握するとともに、必要に応じて学習改善を図ったり、目標の調整を行ったりすることが求められる。そして、これらのことは学習者の学びの実現に大きな役割を果たすと考えている。

更に、授業者は、学習者による評価を通して、授業デザインがどうかであったかの自己評価や必要に応じての修正をするための情報を得ることとなる。

授業実践例

《保健体育科》

選択コース「チャレンジスポーツ」（選択体育）において、学習者自身が選択体育のねらいに迫るためにそれぞれのねらいを具体化させ、どんな場面で、どんな姿になれば達成できたといえるか規準を作成し、学習活動の中でそれに基づく評価活動を展開していった。

《音楽科》

題材「日本の歌曲を味わおう」「世界の愛唱歌を歌おう」（第3学年）他多くの題材において、題材全体を通しての自己評価カードを使っての評価活動を位置づけた。題材の導入において、題材において身につけたい力を提示し、学習の過程において、随時その達成状況を振り返ることができるようにした。また、毎時間の授業後に活動の振り返りと次時（まで）の見通しを記録させることにより、学習者自身の自己評価力の育成に努めるとともに、教師の授業評価の評価情報として活用している。

学習者が身につけた基礎・基本を繰り返し活用する場を設定する

本校では、平成13年度までの研究において、基礎・基本の定着を動的なものとして捉え、常に定着し続けるものと考えた。つまり、身につけた基礎・基本はそれを使うことによって、更にわかりなおしをなされたり、身体化されたりするものであるとしたのである。したがって、身につけた基礎・基本は同じ教科の学習において、それを繰り返し活用する場を意図的に設定することによってさらなる定着が図られるのである。更には、総合的な学習の時間など教科を越えた場面での使用がなされるときに更に確かなものとなっていったり、その定着が十分でないことに気づききっかけになったりすると考える。

授業実践例

《音楽科》

題材「オリエンテーション」で確認した基本的な発声フォームを各自がシートにまとめて、ファイルに保管している。その後の題材「詩と旋律」「合唱の楽しみ」など歌唱表現に取り組む題材や毎時間の導入で校歌を歌う際に発声フォームを意識させるとともに、必要に応じて、自ら作成した発声フォームシートを使って再確認をしている。

学習者の言語による思考及び表現が生かされる場を設定する

本校で、現在取り組んでいる国語力育成に関わる研究は、学習環境に主体的に働きかけ、自らそのデザインに関わろうとする学習者の育成に大きく寄与すると考えている。そのためには、教科学習や学校における活動に必要な力、更には社会生活を営む上で必要な力を育てていく必要がある。本校では、まず教科共通に育てていかなければいけない資質や能力を明らかにし、その指導を進めている。教科の学習においても、それらを意識した場の設定が必要であると考えている。

授業実践例

《社会科》

単元「縄文時代と弥生時代を比較しよう」（第1学年）において、縄文時代と弥生時代の絵や写真資料を基にして、二つの時代を比較する観点を、生徒が自分たちで定めて学習した。資料同士を比較することで、特徴などの異なる点に気づくことができる。この学習を生かして、生徒は、地図を比較したり、グラフを比較したり、文章記述を探し出して比較するなど、様々な資料を比較して、その違いに気づくことができるようになった。

以上が、本校における学習環境デザインの9つの要素に基づく授業実践の事例である。今年度の事例の検証を踏まえて、それぞれの要素について再度、共通理解を図り、全教科で実践に取り組んでいくこととしている。

その成果についての提示については、次のように考えている。

国語科、社会科、数学科、理科、英語科においては、NRT等による結果の比較などが客観的な数値データの一つとなるであろうが、その実施は新年度の4月となるため、現段階での比較はできないのが現状である。

新年度には、学習者や保護者に対する意識調査などを行い、これまでの実践に対する評価を行いたいと考えている。

2. 今後の課題

次年度は、研究のまとめの年ということとなり、今までの成果を基に研究実践を進め、教師による指導や生徒の姿を通しての提案となり得るための努力が必要である。今年度内に本校の実践理論についての共通理解を図り、新年度からの共通実践へとつなげていきたい。また、その評価についても、できるだけ学習者の言葉や保護者の声を通して示すことができるような手だてを講じていく必要がある。あわせて、10月の研究発表会では、その成果を県内外に広く公開すべく、その情宣活動などにも力を入れる必要がある。

学力把握のための学校としての取組

NRT（標準学力検査）の実施（年1回、4月実施）
SET（自己教育力指導検査）の実施（年1回、5月実施）

フロンティアスクールとしての研究成果の普及

- (1) 10月10日（金）公開授業研究会
 ・全教科並びに学校保健の授業公開と教科別分科会
 ・九州全県並びに山口県の中学校、全国付属学校、佐賀市内の小学校に案内
 ・公開内容：1、2年の必修教科並びに学級活動（保健指導）、3年選択教科
 ・講演：演題「子どもとともにつくる授業」
 講師 奈須正裕先生
 ・所感：県内外から400名弱の参観があり、充実した会とすることができた。授業においては、学習環境デザインの9つの要素ということ踏まえ、それを具現化する授業を提案した。2年目の公開授業研究会ということもあり、本校の考えを授業の中で提案に結びつけることができていた。3年目に向けては、更に、教師による指導や生徒の学ぶ姿を通して、本校研究の成果を提案できるように研究実践を進めていきたい。
- (2) 校内授業研究会
 ・公開授業並びに教科別授業研究会と校内授業研究会
 ・県内のフロンティアスクール、近隣の中学校並びに付属学校等に案内
 5月 国語科 学習担当グループによる自主学習を取り入れた授業
 6月 数学科 学習者同士のコミュニケーションを促進する授業
 7月 技術・家庭科 学習者の学習履歴を生かした授業
 9月 社会科 協働学習を取り入れた授業
 11月 保健体育科 協働学習を取り入れた授業
 1月 理科 指導者と学習者による評価活動を取り入れた授業
 3月 英語科 （実施予定）
 ・学力向上フロンティア事業に関わっては、本校研究の過程並びに成果の公開ということで、10月の公開授業研究会とは別に、年間7回の校内授業研究会も広く公開することとしている。2年目の今年度は、校内授業研究会への授業参観も全7回で100名ほどの参加があった。

-
- 【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校
- 【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上
- 【指導体制】 少人数指導 TTによる指導
 その他
- 【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他
- 【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無